

## 「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

冴ゆる夜の小石一つも星となる 高橋 章子

小石は地球にも火星にも在り、星の誕生を起源とする。そんなちつぽけな小石も、心ひとつで輝く星となるのか。と解釈しつつ、この句からふと中島みゆきの歌う『地上の星』を想った。「風の中のすばる／砂の中の銀河／みんな何処へ行つた」の歌詞にある、地上に埋もれる名もなき星がこの小石なのかと。凍てし夜の空に輝く星々は、小石の勳章なのかもしれない。

この国のいたましさなり冬のなる 高橋満利子

元日の能登半島地震を踏まえての一句。天変地異は我が国だけに起きているわけではないが、繰り返し発生する地震と被災者の惨状を見聞きすると、ニッポンが宿命を背負っているようにも感じる。この句、「いたましき」と詠まず「いたましさなり」と冷静に記述したこと、逆に訴えるものが見えてきたと言える。

春寒し達磨の口の一文字 高橋美智子

福達磨の引き締まった口元からは、達磨大師のように

どのような困難にも打ち克つて立ち上るという力強さが伝わってくる。春寒し。寒さに耐え座禅を続ける達磨を想いつつ、作者もまた寒の戻りの厳しさに耐える。

凍蝶の従容と地に伏せぬたり 竹森 美喜

凍蝶は、凍てたように動かない冬の蝶。生きているかと思うと死んでいることもあるらしい。一方で「従容」は、動じることなく落ち着いた様をいう。へうつむきて蝶凍ててをり生きてをり 永田耕衣が先行句にあるが、掲出句ではこの凍蝶を「従容と地に伏せ」と描き、生と死を慈しむ。

小綬鶏に呼ばれ明るき林へと 田中 京

小綬鶏はキジ科の鳥。大正時代に中国からペットとして日本に來たそうである。地鳴きのあと「チヨットコイ」と囀り、作者もその声に呼ばれ嬉しく林へ分け入った。「明るき林へと」の措辞に実感がある。

羽子つきの音の單純途切れたり 寺田 幸子

羽子つきの羽子板に当たるときの音は確かに單純明白だ。單純だからこそ、それが途切れたときの印象は強いのだろう。「途切れたり」の後に、時が止まった、言いようのない間合いを感じる。羽子つきの二人の笑顔も想われる。

水鳥を海賊船の波がもみ 長井 敦子

古くは日本の村上海賊。最近はソマリア沖で貨物船を乗っ取る海賊が横行している。箱根芦ノ湖には観光用の海賊船が運航する。この句、水鳥に巨大な海賊船が接近したというところに意外性がある。大波に水鳥が大いに揺れている場面が想像でき、面白い。

短日の段に我が影三つに折れ 中嶋きよし

「三つに折れ」がリアル。作者がそれを発見して驚いたのは、その三つに折れた長い影が自分の心の模様だと気付いたからだろう。でも、句作上ではそのような内容は盛り込まず、読者の想像に任せている。そこがいい。

枯柳生きてゐますよしなやかに 中村 敬子

どっこい、生きています。という気持ちを枯柳に託して詠んだとも思えるけれど、ここは素直に、枯柳を仰いだ時に枯柳からそう感じ取ったと思いたい。「しなやかに」が柳の言葉として生きています。

空のビルビルの空なる初景色 中村 東子

高層ビル群とそこから覗く空が見えるだけの初景色。「空のビル」といったらいいか、いやいや「ビルの空」といったらいいか、空とビルがそれぞれ自己主張し、ど

ちらも譲らない。大都會の初景色を詠んだ異色作。

座禅会や燭を動かす隙間風 中村 幹子

隙間風が微かに燭の火を揺るがす。座禅会の静けさの中で唯一の「動」である。その隙間風の動きが一層、座禅会の静けさを深めている。燭に焦点を定めての好句。

花びらのごとく炬燵に集ひけり 野沢 慶子

ひらひらと炬燵に着地したのだろう。集まって炬燵にあたっただけの句であるが「花びらのごとく」とは普通なかなか言えない。炬燵の温もりを求め、花の化身となった人々。とても楽しい一場面である。

終電と始発のあはひ小米雪 橋本 恭子

東京の初雪を幻想的に詠む。小米雪は細かい雪。終電から始発の出る夜明け前までの間の人間のドラマをこの句に見る。始発に乗らなければならない受験生、若い男女、酔っ払い、重い荷を背負う農婦などの顔や仕草。そのような空想が広がる中で、小米雪がひたすら降る。

たゆたふる水面のきらや初暦 長谷川菊男

まだ新の今年の暦。心を清くしてそれを捲ると、その向うにきらきら輝く水面が現われた。水の表面がゆらと

動き、神々しく光が漂う。新しい一年の幕開けだ。

同じもの見て食べ今朝の淑気かな 島山 奈於

いつもと変らぬ暮らし。夜が終れば朝が来る。朝の膳に手を合わせ「戴きます」と発するその声も、いつもと同じだ。異なるのは一つ年を越したということ。無事に年を越した家族。そこに淑気を感じている作者が居る。

田作へちいさいさかな大好きと 浜田 優子

まあ可愛らしい子だこと。お節の重箱にある田作りを見つけ「わたし小さい魚だあくいすぎ」と。田作りは、ごまめ。かたくちいわしを素干しにしたもので、固いしほろ苦いが、あの餡色した姿は確かに魅力的である。

岩牡蠣の岩ごと炙り海にほふ 原田ミチ子

夏が旬の岩牡蠣。水揚げ時期は六月から九月まで。殻と身が大きく育ち、厚みもあり味はジュシー。この旬ではその炙り牡蠣から海が匂うという。岩ごと炙っているのでも然もあらん。弱った体には最適な栄養源でもある。

味噌雑炊みな残党の貌をして 春田 千歳

「みな残党の貌」というのが面白い。だし汁にご飯を入れ煮立て、味噌を溶き入れて作る雑炊。味噌の香りが

鄙びていて野性的で、誰もが食べてみたいと思う一品だ。その食べる顔といたら、恐らく戦に負け敗走する残党たちの如き貌をしているだろうと掲出句はいう。味噌雑炊からの発想豊かな一句。

柔らかな眼マスク外せば意志の顔 平野 豊雄

受験生の教育に永く携わってきた作者らしい句である。このマスクはコロナウイルス蔓延下のマスクであろう。愛くるしい眼だけしか普段は見えてなかった子が、マスクを外した途端に顔全体からその子の「志」が見えてきた。作者はそれを「意志の顔」と評し讃える。その顔に作者は、若かりし頃の自分の顔を見たのかもしれない。

冬の日の書架に陽のさす「創世記」 平野 美子

旧約聖書冒頭の書の「創世記」には「はじめに神は天と地を創造された。∴神は「光あれ」と言われた」と書かれている。掲出句の書架に差す陽は神の創られた光とも思え納得した。一方、日本の『古事記』では「そのとき地は、まだ固まっておらず、水に浮かんだ脂、漂うクラゲのようであった。そこへ植物の茎が伸びるように伸びてきた物があつて、そこに神が成った」(訳・町田康)と、神は後から生まれたように記述されている。でもここは「古事記」と置くわけにはいかない。

貼るまでに湿布丸まる霜夜かな 本多 遊子

湿布を貼り損ない、結局一枚無駄にしてみました。その無駄が「丸まる」という具象からよく見えてきて、それだけでこの句は面白い。しかし作者は面白いだけに終らせず座五に「霜夜かな」を置き、切なさを加味させている。この霜夜で句が引き締まった。へ川の字に寝て乾電池めく霜夜 明俊。

急須の蓋の穴の定位置寒の明 松本 余一

急須の蓋の穴は急須の口に近い側に向けるものと私は幼少の頃に教わった。それが科学的かどうかは知らないが、今でもそこが私の定位置。掲出の句はその穴の位置を俳句に仕立てたもの。穴の発見が全てである。「穴の定位置」で終って、もう季語など付けなくてもよいくらいの出来上がり。松本さんの定位置は何処だろう。

天井の龍を勞ふ煤払 持田きよえ

寺の天井画の龍も煤払いし、新年を迎える。ただ払うのではなく、この一年ご苦労様と心を籠めて払う。襷掛けして働く作者の立ち姿が目に見えよ。

日にかざす生みたてといふ寒卵 森尻 禮子

鶏小屋から運んできた生みたての卵。寒中の卵なので

滋養に良いとされる。その寒卵を明るい日に翳してみても作者も何やら一日を明るく過ごせたようである。そう推察できるほどの新鮮さがこの句にはある。

出会ひたる今日の一花や花八つ手 山田 雅子

一期一会は人間同士の間だけでなく、花との出会いにもまた一期一会と言える時がある。この作者にとつての今日の一推しは、八つ手の花。球状に細かく咲いた白色の花は、近づけば近づくほど美しい。「今日の一花や」の「や」は作者確信の感動の切れの一字。

甲斐駒は理想の漢凍ゆるむ 横須賀智子

甲斐駒ヶ岳は南アルプス北部に聳える大きな山。麓から仰ぐその姿はまことに高貴たる山容をしている。その甲斐駒ヶ岳をこの作者は「理想の漢」という。包容力があるのだろう、この山は。残雪期を経ての雄大な姿が待ち遠しい。

麦の芽の熟る日遠し焼けし畑 和田 郁子

麦が芽を出し、本来であればウクライナはこれから麦秋が待たれるところであるが、この句では「熟る日遠し」と詠う。爆撃で焼かれた麦畑。ウクライナに在る「キーウ俳句クラブ」に敬意を表しての哀切極まりない一句。

天晴れや白無垢纏ふ冬の富士 阿部 草薫

富士山が雪という白無垢を纏っていると詠む。また、それを「天晴れや」と謳う。随分前のことだが富士山麓のタクシー運転手さんに、いつの季節の富士山が好きか聴いたら「雪の富士です」と即答された。天晴れ。

一升餅背負ひ尻餅あたたかし 伊澤やすゑ

私が産湯に浸かった信州には「誕生祝い」をする風習がある。満一歳になる初誕生日の頃に、子の成長と前途を祝い、近親者や近隣の人たちを呼びお祝いするのだ。力餅を搗きあんころ餅を作つて配る。白い丸餅も作り、これを風呂敷にくるみ、子に背負わせる。掲出句の一升餅も同様の通過儀礼なのだろう。重くて尻餅をつくのも愛嬌。折しも暖かな春。この一年を無事に過ごしてきた赤ちゃんの無邪気で明るい顔が見えるようだ。

強面に野心ありあり寒鴉 市村 啓子

寒鴉には、身動きもせず枝に立ち続けているイメージがあるけれども、この句の作者は寒鴉の貌に「強面」を見、そこから「野心ありあり」を感じ取った。この強面の発見は、鴉と対峙していなければ出来なかつた筈。普段からの観察が如何に大切かということが解かる。

彼の世から戻つたと兄春の雷 牛込はる子

二月五日、雪が降るさ中に雷が鳴つた。作者もその現象（氣象用語で「雷雪」という）を体験した。この句ではそれを「春の雷」と捉え、そこから兄を詠む。お兄さんが現われ「彼の世から戻つた」と。切ないが、春雷でなにか救われたような気分になつた。

野良猫の尾にしがみつく枯葉かな 内海 範子

枯葉を擬人化し「しがみつく」と表現。それも野良猫の尻尾にしがみつき「おい、どこへ行くんだ。置いていかないですよ」と、尾に翻弄されながら右往左往する。可笑しさと哀しさと、その両方がこの句に宿っている。

緑茶飲み克己の気概春の立つ 大下 壽櫻

立春を迎えた作者の心映えが一句を貫く。「克己の気概」とは、おのれにかつこと、そして自制心。逸る心を制しつつ向上を願ひ、素晴らしい季節を迎えようというのである。緑茶の温もりを手にしての感慨。

夜鳴蕎麦すする漢の背に自足 太田 裕子

雪の降る深夜の夜鳴蕎麦の屋台。そこに一人の男が来て、蕎麦を注文する。「二八そば」と書かれた貼紙が見える。まるで『鬼平犯科帳』の映像を観ているような場面。

蕎麦を啜っている男の背。この句の作者はそこに「自足」を感じたという。今日の業を為し終え温かい蕎麦で腹を満たしている小さな幸。そのような自足なのだろう。

山焼きや無用な執着燃え尽くす 小野 直美

山焼きの火が枯木・枯草などを焼くのをみているうちに、作者の心の奥にある雑念がほどけてきたのだろう。燃え尽くす炎に心を許したのだ。枯草のみならず「無用な執着」をも燃え尽くす敵かな火の海に、居住まいを正された思いがする。

小正月クイズに答へ子に勝ちぬ 金子かほる

子どもより早く正解が言えたのだ。テレビの前で親子仲良くクイズ番組を見ている日常の何でもない有難さ。勝って良かった。

機内まで華やかヴェネツィア謝肉祭 金田 知子

謝肉祭はカトリックで行われる祝祭。カーニバル。俳句では春の季語になつている。道化・滑稽・歓楽が許され、仮面をかぶり大いに飲み踊る日。この句では謝肉祭に赴くための飛行機内の様子を「機内まで華やか」と詠む。謝肉祭を楽しみにしている人々の浮き浮きした振舞いが想像される。

初夢や「高砂」謡ふ夫微笑む 金田 喜子

初夢での出来事。夫があの日出度い能の「高砂」を謡っているのだ。それも笑みを浮かべて。結婚式の仲人をなされたこともあつたのだろうか、助け舟が無くても、最後まできちんと謡えたに違いない。縁起のよい初夢をご覧になられ、何より。

初場所や龍昇るがに阿あびの四股 菊地 孝枝

阿あびは埼玉県越谷市出身の現役力士。平成二十五年五月場所で初土俵を踏み、最高位は現在までのところ関脇。長身で、四股を踏む時はこの句のとおり、龍が昇るように足をどこまでも高く上げる。越谷市民にとっては誉れ高き力士だ。因みに、相撲の四股は邪気を祓い大地を鎮める神事に由来するといわれている。

母遺す吾の通知表左義長へ 北 好夫

通信簿、通知表は児童・生徒の保護者宛てに通知される。学業成績の記載内容に親は一喜一憂し、子はのほほんとしている。その古い通知表を亡母は大事に残されていたが、作者は断捨離するためそれを燃やしに左義長、つまりどんど焼きの場へ持つていった。火が点けられ、やがて激しく燃えるんど。その通知表も灰となり空へ舞い上がる。過去を消してこそ未来があるのだろう。

湯豆腐を父母と取り分ける夢 木山 有衣

家族団欒。久しぶりに父母が夢に登場して嬉しかったに違いない。湯豆腐をお父さんお母さんと取り分けているとは、ご生前にそういうことが実際にあったのだろうか。と察するが、何とも懐かしくめでたい。

貝の夢つひには眠る山の奥 久保田勝一

貝の夢を見たのか、貝が見た夢なのか。そのどちらの方が「つひには眠る山の奥」と符合するのか。その手掛かりは何処にあるのか。魅力のある句だけに、そこがもどかしい。いや、そのもどかしさが魅力なのである。

名山を四方に拝し初明り 栗原 季星

秩父の山というと、両神山、三峰山、武甲山、雲取山、御岳山など。作者の元朝はこれらの峰々に囲まれながら東天の曙光を厳かに迎え入れることから始まる。「名山を四方に拝し」には郷土への誇り、敬愛の心が窺える。

寒の月真砂のごとき我等刺す 小唄あゆみ

我々人類は地球の表層の上に暮らし、かなり威張っているけれども、自然界の中では、長い宇宙の歴史の上では「真砂のごとき」存在に過ぎない。寒月を仰ぎながら月光を受け入れながら作者はそのことに思いを馳せる。

菠薐草炒めが好きと言ふ少年 小泉まり子

作者にとつては菠薐草が好きだということが意外だったのだろう。昭和三十四年、アメリカのアニメ『ポパイ』がテレビで放映された時、少年たちは菠薐草が体に力を与えてくれる食べ物であると信じた。みんな菠薐草を食べて腕の力瘤の成長を楽しみにしていたのだ。あれから六十五年経った今も、菠薐草炒めが好きという少年が居ることに、作者ならずとも驚きを隠せない。

Z世代も父親となり屠蘇祝ふ 幸喜美恵子

「Z世代」は世代分類の「ジェネレーションZ」から来ている。年代的には1990年半ばから2010年代生まれの世代。不況の時代、情報過多の時代に育ったこの世代は、不要な情報を取捨選択するスキルに長け、新聞やテレビからは離れて暮らす。ブランドについては自分の価値観に合うかどうかの視点を重視。掲出句でも、古臭い風習だからと屠蘇を拒んだりするのではなく、屠蘇を酌んでの新年の祝を価値として認めている。

搔き込みの昭和ゆとりの桜鯛茶漬 小濱けえ子

昭和の時代と平成・令和の時代とを比べている句。かつてはお茶漬を急いで搔き込む人が多かった。今は「ゆとり」の時代、桜鯛なんぞを乗せ茶漬をゆつくりお召し

上がりだ。健康には勿論、搔ぎ込まない方がいいが。

凍鶴の燠を秘めたる胸かたち 小林ゆきお

「燠」(おき)は赤くおこった炭火、おきび。身動きもせず立ち尽くす凍鶴のからだの中にはきつと燠のような熱いものが秘められているのだらうと、鶴の「胸かたち」から作者は思った。(鶴啼くやわが身のこゑと思ふまで 鍵和田柚子)と同質の緊張感が感じられる句である。

囀を破る鳥の鋭声かな 小林 玲

囀りは春の鳴禽類の囀りを総括している。鳴禽類とは複雑に囀ることができる小鳥類で、鶯、頬白、雲雀、河原鶉など。鳥は一年中飛び回っているので、その声を囀りとはいわない。そこでこの句。美しく囀る鳥の声を打ち消すかのように鳥が鋭声を張り上げている。仲間外れされている鳥の気持ちはよく解る。

家計簿に使途不明金年逝かす 斉藤久美子

使途不明金、裏金などと、新聞やネットでは毎日かまびすしい。主に会社や諸団体、政党に多いのであるが、家でも店頭使途不明金が見つかった。こちらは専ら記憶が薄れてしまったの不明で、誰かに責められるものではないが、もやもや感が年を越してしまったようだ。

よく遊びよく働いて寒卵 鳥 昌子

「よく遊び、よく働いて」に感心。元氣の出る源である寒卵を見ているだけで、作者の生きるモチベーションは否応でも上がる。これからも俳句とよく遊び、よく働いていただきたい。

遠富士に新生児色初明り 嶋谷 宗泰

遠く鎮座する霊峰富士。初明りはその富士の雪の肌を染める。この句では曙光の色を「新生児色」と名付ける。これは作者の造語だらう。確かに生まれたての赤子は仄紅い色をしている。新年に相應しい愛でたい命名だ。

来し方の片々ゆかしたびら雪 清水 悠太

来し方の記憶、それも取るに足りないあれやこれやのきれぎれの思い出を、何となく懐かしんでいる。春先に降るたびら雪の、淡くて大きな雪を前にしての感慨。

湯たんぽを抱く故郷を抱くやうに 首藤 久枝

湯たんぽはたいがい足元に置くもの。それを胸に抱くということに少しく驚いた。胸を温めたことが無かったからである。この句の「故郷を抱く」も胸に故郷を抱くということであつて、湯たんぽも故郷も作者にとつては身近でありがたい存在。温かく作者を包み込む。



年末ジャンボの列に笑顔の車椅子 新海あぐり

不自由な体ながら車椅子に乗り年末ジャンボ宝くじを  
買いに来た、その光景を詠む。宝くじは夢を買うという  
が、この車椅子の方は笑顔を絶やさず嫌な顔もせず列に  
並んでいたのだろう。年末多端な折りの笑顔の一句。

極月の日差しの強き一日かな 菅原 淑子

極月は師走。一番寒い季節で、春を待ち、梅を待つ。  
その寒い中でも、日向ぼこする以上に日差しの強い日が  
あると、掲出句は言う。毎日家の洗濯を担当している私  
からすると、こういう日差しの日は干し物がよく乾いて  
有り難い。「強き一日かな」と作者も肯定している。

根府川蜜柑少女らの指しなやかに 杉淵真喜子

小田原市の根府川は蜜柑の産地でもある。蜜柑畑は海  
沿いの、日当りのよい傾斜地にあり眼下に相模湾が一望  
できる。この句の「少女の指のしなやかに」からは蜜柑  
を楽しく食べる少女たちの笑顔と柔らかな指が見える。

国境も戦場もなく冬銀河 鈴木 智子

実際は国境があり各地に戦場がある。内戦も多々ある。  
毎日死と隣り合せて居る人は数えきれない。宇宙の星々  
の中で戦をしている星は地球だけかもしれない。我々は

冬銀河の輝きに希望を見出すしかないのだろうか。

除雪車の置きゆく重き雪を搔く 鈴木 藤子

岩手にお住まいの作者は毎年身近に除雪車を見ておら  
れるのだろう。道の脇に寄せられた、除雪した雪をまた  
搔かねばならないのだが、その雪が重いとこの句は語  
る。生活の実感が綴られていて真実味のある句である。

閨作品集（続き）

病床吟

岩根 甲

泣きさうな電車よ花の雨を来る  
絶食に替はる点滴花の昼  
花見旅病院の妄想覚め易し  
死神の返事遅るる花過ぎて  
お茶漬やタバコ吸ふ人なくなりぬ  
小鳥来て草や木の香の賑はへる

（令和六年三月十日）